

4 研究のまとめ

(1) 研究の成果

- 児童が相手意識をもってコミュニケーション活動をするための単元構成を提案し、授業実践を通して、その有効性を明らかにしました。単元のゴールとしてパフォーマンス課題を位置付ける単元構成の工夫を通して、児童はコミュニケーションの目的を理解し、見通しをもって主体的に活動することができました。
- 児童が思いや考えを伝えたい必然性のある活動の場面を取り入れたパフォーマンス課題を設定することで、児童は、どの事柄をどのように伝えるかを思考、判断し、相手意識をもって伝えたいことを表現することができました。
- 教師が判断するめやす（判定基準）をもつことで、児童の具体的な姿が明らかになり、単元を通じた指導を効果的に考えることができました。

(2) 今後の課題

- パフォーマンス課題を取り入れた授業づくりについて、他の単元や学年においてもどのようなパフォーマンス課題を設定し、どのように評価へつなげていくことができるかを考えていく必要があります。
- 児童の思考力・判断力・表現力等が単元を通してどのように向上していくかということについて、教師が判断するめやす（判定基準）をもった実践を重ね、その汎用性を明らかにしていく必要があります。